

南山大学史の始点

永井英治

はじめに

『南山大学七十五年史』は、本来であれば二〇二一年九月の開学記念式典にあわせて刊行されるはずであった。刊行が遅れたのは、二〇二〇年度初頭のコロナウイルス感染症対策が優先され、編纂を担当する委員会の設置が遅れたためである。このこと自体、記録にとどめられるべきであるし、さらにこの事実から、『南山大学七十五年史』はわずか一年半ほどで編纂を完了する予定であったこともわかる。これは、新制大学創立五十年を期して編纂された多くの大学史の成果をほぼ棚上げするものであった。それでも、七十五年史を作っておかなければ忘れ去られてしまう事実を残すという目的には意義が認められ、『南山大学五十年史』^{〔1〕}以後の二十五年度の記述に重点を置く方針が確認されたのである。

『南山大学七十五年史』が二〇二一年九月に刊行される予定であったことは、南山大学史の始点が一九四九年に置かれていないことを意味する。これが本書編纂のもうひとつの特徴である。

南山大学は一九四九年四月に新制大学として発足した。『南山大学五十年史』はこのことを念頭において編纂された。しかし、『南山大学五十年史』の隣に並ぶはずの『南山大学七十五年史』は一九四六年を始点とする。七十五年史編纂の過程では、五十年史を継承することが意識され、より具体的には、装丁において『南山大学七十五年史』は『南山大学五十年史』をかなり意識して選定された。二冊が並んだ様子が装丁を考える大きな前提として意識されたのである。しかし、刊行の暁には対になるかのように並ぶ二冊の間で、南山大学史の始点が異なるというのは異例であるといつてよいであろう。本稿の目的は、この異例な編纂方針の転換を解説することにある。

南山大学史

『南山大学五十年史』は、南山大学で初めて刊行された年史である。一九九九年の開学五〇周年を期して編纂された『南山大学五十年史』は、新制大学五〇周年を契機として編纂された他の大学史と同じように、新制大学としての起点をもって自校史の始点としている。これは学長序文に記された通りであり、『南山大学五十年史』の枠組みは新制大学史として構成されている。

しかし本文の叙述では、前身校である名古屋外国語専門学校（一九四七年に南山外国語専門学校から改称される）の歴史が南山大学史の叙述の中に組み込まれている。これは年史の構成上の問題ではなく、前身校の存在そのものが南山大学の階梯の始点に置かれているのである。

この理由は、南山中学校（旧制）の創設者であるヨゼフ・ライネルスから後事を託されたアロイス・パツへの意図として叙述されている。パツへは名古屋外国語専門学校を設置の段階から「大学」の前身と位置付けたのであり、

それはパツヘが田中耕太郎と会談したときの様子から如実にかがうことができる。

田中耕太郎はカトリック関係者の間では著名な教育学研究者であり、『日本カトリック新聞』『カトリック新聞』にもその名が散見される。戦後は文部大臣・参議院議員を歴任しており、カトリック関係者が学校設置について相談するに相応しい人物であった。

田中耕太郎との会談では、はじめ、パツヘは高等学校（旧制）の設置を考えていた。まずは南山中学校（旧制）の卒業生の進学先を考えていたのである。しかし、高等学校設置がほぼ無理なことを知らされ、かわりに外国語専門学校設置を勧められたことから、パツヘの意志は変わっていった。別稿^②で論じたように、戦後の教育界には外国語専門学校を貿易などの要地に全国的に配置する政策がうかがえ、名古屋では南山学園がその任を担うよう、パツヘは田中耕太郎から誘導されたのである。

田中の誘導にパツヘは応えた。パツヘの方針転換があっさりと進められたことに、パツヘの意図が高等学校（旧制）の設置ではなく、高等教育機関の設置であったことがうかがえるのである。旧学制では、高等学校（旧制）——大学（旧制）のラインとともに専門学校という選択肢があり、これを階梯に高等教育機関の改編を迎えるパツヘの構想が立ち上げられたのであろう。

このように、設置者自身の意図が、名古屋外国語専門学校においては来るべき学制改革の礎であったことが『南山大学五十年史』の本文叙述の基本方針であった。南山外国語専門学校開学の初年度に設置されたのは英語科と華語（中国語）科であったのは、外国語専門学校の基本に做った実用言語重視の姿勢の現れであるが、次年度から独語科と仏語科を増設したのは、外国語専門学校の後のことを考慮したものであったと考えられる。

以上のように、『南山大学五十年史』は叙述では前身校の歴史を大学史に組み込みながら、新制大学として発足

した自校史の枠組みを重視するものであった。

『南山大学七十五年史』は、はじめにで述べたように極めて短期間のうちに編纂された大学史である。そのため、『南山大学五十年史』で扱ったことは同書を利用して、同書以後のことに重点を置いた。したがって、叙述において前身校の位置付けには『南山大学五十年史』と『南山大学七十五年史』との間に方針の転換はない。さらに、枠組み自体においても、始点を一九四六年の南山外国語専門学校の開学に置き、叙述との整合性を高めている。

『南山大学七十五年史』の始点を変更した理由は、高等教育機関としての連続性と同窓会の連続性である³⁾。同窓会についていえば、前身校の同窓会を本校に組み込むことは珍しいことではない。さらに、南山大学では毎年開学記念式典が行なわれているが、その開催年数が一九四六年を起点として数えられている。

高等教育機関としての連続性については、前身校を組み込むというより、名古屋外国語専門学校と南山大学をみる立場の問題である。このことを南山学園史の叙述から考えよう。

南山学園史の中の南山大学史

学校法人南山学園からは、これまで二冊の南山学園史が刊行されている。はじめの『南山学園の歩み』⁴⁾は判型も小さな冊子であり、その叙述では、南山学園の設置母体である神言修道会の日本上陸からその後、南山中学校(旧制)と南山小学校(旧制)の設置とアジア太平洋戦争、南山外国語専門学校の設置、南山大学の設置が扱われている。

特徴的なことは、叙述の対象が時間の進行とともに南山中学校(旧制)↓名古屋外国語専門学校↓南山大学へと移っており、その時々々の主な関心となっていることである。言い換えれば、戦後の叙述においては中等教育段階が

ほぼ論じられていないことを意味する。コンパクトな年史叙述の制約が働いたものと考えられよう。この叙述では、名古屋外国語専門学校は南山大学の前史とは位置付けられず、独自の地位を保っている。南山学園史としてみたとき、学園を構成する中等教育・高等教育それぞれについての歴史が叙述されてよいであろうが、本書の造本がそれを不可能にし、代わって、その時々々の旗艦に位置付けられる学校について叙述したのである。本書においては、南山学園史は単線的な歴史として描かれている。

『HOMINIS DIGNITATI 南山学園創立75周年記念誌』は、名称こそ記念誌であるが、南山学園と南山学園を構成する学校の沿革史では浩瀚な書物といえる。本書では、学校法人南山学園が経営する学校の歴史がそれぞれ扱われているのであるが、名古屋外国語専門学校と南山大学の歴史は章立ての上で連続するものとされている。本書がこのような構成となった目次案を提案したのは実は私で、それに対して川崎勝勝編纂副委員長からは当然のごとく質問がなされた。私は南山大学の設置を画期とするのは当然の発想であるが、南山学園においては、南山外国語専門学校が設置されたことがその後の歴史を強く規定していると答え、その目次案が採用された。

『HOMINIS DIGNITATI 南山学園創立75周年記念誌』では、高等教育機関としての南山外国語専門学校の設置が重視され、南山大学はその後に連続するものと位置付けられたのである。ただ、私の意図としては、南山大学の設置が重視されるのは当然なので、戦後の南山学園における学校再編の起点でもある、旧学制下で行なわれた南山外国語専門学校の設置を強調すべきと考えたのであった。この発想は『南山大学七十五年史』の構成にも採用されたということが出来るが、私の意図は南山学園全体の戦後改革の起点でもあるということにあった。

南山学園史という枠組みを除けば、『HOMINIS DIGNITATI 南山学園創立75周年記念誌』の枠組みと構成は、『南山大学七十五年史』に継承されたことになる。ただし、南山大学史という枠組みが南山学園史の中の高等教育機関

の歴史という枠組みと一致すべきか、今後も検討が必要であろう。

むすびかえて

最後に南山大学の中で、編纂作業が始まったものの遂に完成することなく終わった南山大学二十五年史での枠組みと構成を考えてみたい。

現在残されている資料に神言修道会についての原稿（原稿）があることから、南山大学二十五年史でも名古屋外国語専門学校についての記述は準備されたと考えられる。しかし、目次案などは残されていないため、果たして名古屋外国語専門学校の位置付けはどのようなものであったかは不明である。枠組みについては、一九七四年を期して編纂事業が始まり、残された「年表」からはやはり一九四九年を始点としていたようである。

この年表は記念品として配付されたアルバムの冒頭に挟まれていたらしく、一九四九年以前の記述はまったくない。一九四九年にも一九四六年にも在籍していたであろう教職員は少なからずいたであろうから、どちらも生々しい現代史であったかもしれない。ただし、南山大学は一九六四年に現在の地に移転しており、一九七四年はちょうどその一〇年後である。南山大学が移転した後、もと大学があった五軒家町は南山学園の拠点と位置付けられ、大学講堂は学園講堂となった。大学と学園を区別する発想が強くなるにつれ、南山大学史と南山学園史を区別することが普通となって、このような年表が作成されたのかもしれない。

註

- (1) 二〇〇一年、南山大学。
- (2) 永井英治「戦後設置の専門学校の歴史的意義―外国語専門学校の「遺産」―」『アカデミア』人文・社会科学編第八二号、二〇〇六年一月。
- (3) これは総務担当副学長から永井に伝えられた理由である。
- (4) 一九六四年、南山学園。
- (5) 二〇〇七年、南山学園。
- (6) 南山アーカイブズ所蔵。